白南風の夏

さら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白南風の夏

【Ｎコード】

Ｎ３１０９Ｎ

【作者名】

さら

【あらすじ】

海沿いの小さな田舎町で暮らす涙子（るいこ）と陽人（はると）。性格も育つ環境も違う陽人のことを、涙子は次第に意識し始める。そして十四歳の夏、涙子は陽人の出生の秘密を知り……

白南風（しらはえ）とは、梅雨明けの時期に、南から吹く風のことです。

1（前書き）

白南風（しらはえ）――梅雨が明けた頃に、南から吹く風のこと。ちなみに黒南風（くろはえ）は、梅雨のさなかに吹く、南風のことだそうです。

1

額にじんわりと汗がにじむ。海から吹く南風が、少し切りすぎた前髪を揺らす。

昨日十四歳の誕生日を迎えたばかりの涙子（るいこ）は、デニムのショートパンツにサンダルを履いた足を止め、何気なく空を見上げた。

そういえばさっきテレビのニュースで、梅雨が明けたと言ってたっけ……真っ青な空には白い雲が流れ、夏の始まりの日差しが、Tシャツから伸びる腕にじりじりと照りつける。

涙子は吹きぬける潮風をすうっと吸い込むと、緑の木々に覆われた狭い石段を、一気に駆け上がった。

「おばあちゃん！」

石段を登りきった高台にある、古くて小さな一軒家。そこが涙子の父方の祖母の家だった。

「おお、るいちゃんか。あがんな、あがんな」

開けっ放しの玄関の中から、しわだらけの笑顔で祖母が言う。

「学校はもう終わったんか？」

「うん。明日から夏休みだよ」

「そうか、そうか」

涙子はサンダルを脱ぎながら、祖母の家の中をそっとのぞきこむ。すると薄暗くて、かすかに線香の香りが漂う部屋の中から、陽人（はると）が同じようにこちらを見ていた。

涙子と同い年の陽人は、この家にずっと、祖母とふたりで暮らしていた。いつから陽人がここにいたのか、思い出せないほど小さな頃から……そして周りの大人たちは、『あの子は親戚の子』としか教えてくれなかった。

「るいちゃん、ばあちゃんの作ったトマト、食べるか？」

「うん、食べる食べる！おばあちゃんのトマト、甘くておいしいんだよねぇ」
涙子はそう言いながら、居間の小さなちゃぶ台の前に座った。縁側の向こうの庭には、小さな畑があって、祖母はそこで少しの野菜を作っているのだ。
蝉の声を聞きながら、赤く実ったトマトを眺めていたら、いつの間にか陽人がすぐそばに来ていた。
「髪、切った？」
「うん。前髪だけ」
「切りすぎ。すっごくヘン」
涙子が陽人をにらむ。陽人はにやりと笑うと、何事もなかったように涙子の前に座る。
「な、なによっ、ハル！あんた最近、生意気だよ！」
「そうかな？ほんとのこと、言っただけだけど？」
「うわっ、ヤな態度！あたしより年下のくせにっ」
「ちょっと誕生日が早いだけで年上ぶるな。ガキ」
言い返そうとして口を開けた涙子の前に、祖母がトマトをふたつ運んできた。真っ赤に輝く、祖母自慢のトマト。
「わぁ！おいしそう」
「こんなんでよければ、たくさん食べな」
「うん。いただきまぁす！」
涙子はトマトを手に取り、そのままがぶりとかじりついた。じゅわっと甘酸っぱい味が口の中に広がってくる。やっぱり祖母のトマトは格別だ。
「サルか？お前は」
「うるさい、ハル。殴るよ？」
陽人はトマトを頬張る涙子をおかしそうに笑うと、もうひとつのトマトを同じようにかじった。
陽人の部屋は、祖母の家の中で一番景色の良い部屋だった。

開け放した窓からは、緑の林と、その合間に真っ直ぐな水平線が見える。部屋に吹き込む潮風が、古びた風鈴を鳴らし、机の上に置いてある真新しいままの教科書を、ぱらぱらとめくった。
「なんで学校来ないの？」
涙子は見慣れた景色を眺めた後、窓辺に寄りかかり、視線を陽人に移した。
「勉強なんて意味ないよ」
陽人は勉強机の椅子に反対向きに腰掛け、背もたれに頬杖をつくようにして答えた。
「なに言ってんの？そりゃあ、勉強はあたしも嫌いだけど……学校は行かなきゃダメでしょ？」
「そんなことないって。学校の勉強よりも大事なこと、あると思わない？ばあちゃんの手伝いするとか、アルバイトもやりたいし……」
「アルバイト？中学生がバイトなんかできるわけないじゃん」
そう言ってふうっとため息をつく。窓からの風が前髪を揺らし、涙子はさりげなく右手で押さえた。
陽人とは幼い頃から、きょうだいのように育ってきた。体が小さくて泣き虫だった陽人は、男勝りの涙子の影にいつも隠れていた。可愛くて、優しくて、おとなしくて……そして頭がよかった陽人。
それが中二になって初めてのテストで、学年トップの点数を取ったあと、陽人はぱったりと学校に来なくなった。
どうしてだろう……陽人は変わった。涙子の背に追いついた頃から、陽人は変わった。
すると、黙り込んだ涙子に、陽人がふっと笑いかけた。
「他にもいろいろあんだよ。涙子みたいなお嬢さんには、わかんないこと！」
「なによ！？その言い方！やっぱりあんた、ムカつくっ」
そう言いながら、涙子の胸がほんの少し痛む。
陽人には両親がいないから。優しい祖母に育てられてはいるが……もしかして陽人には、涙子にはわからない苦労があるのかもしれ

ない。
「涙子」
気がつくと目の前に陽人が立っていた。いつの間にか、涙子より背が高くなっている。
「な、なによ？」
「これやる」
陽人が涙子の手のひらに、小さな桜色の貝殻をのせる。
「誕生日プレゼント」
顔を上げた涙子の目に、陽人の笑顔が見えた。それなのに「ありがとう」という言葉が、なぜか素直に出てこない。
「るいちゃーん！お母さんが迎えに来たよ！」
玄関先から祖母の声が聞こえた。陽人が涙子の背中をぽんっと押す。
「ほら、お迎えだよ。お嬢様」
「うるさいな。じゃあ、これ、もらっといてあげる」
「大事にしろよ」
陽人の声を背中に聞きながら、涙子は振り返らないで部屋を出た。右手に小さな貝殻を、大事に大事に握りしめて……

1（後書き）

新しいお話を始めました。

不定期連載になると思いますが
更新されていたら、ちらっとのぞいてやってください。
全８話くらいの予定です。

よろしくお願いいたします。

2

頭に降り注ぐような、蝉の声を聞きながら石段を下りる。祖母の家まで迎えに来た母は、涙子のことを一度も振り返ろうとしない。

涙子は何気なく手のひらを広げて、貝殻を見つめた。するとなぜか、幼い頃の陽人の姿が浮かんできた。

「これ、るいちゃんにあげる」

涙子の誕生日には、毎年必ず、海岸で拾った貝殻をくれた陽人。

「大事にしてね」

そう言って、少し照れくさそうに笑う陽人の顔が好きだった。涙子の机の上のガラス瓶の中には、そんな陽人との思い出がしみこんだ貝殻たちが、今も大事にしまってある。

「涙子」

母の声が突然響いた。涙子は思わず右手を握りしめる。

「夏休みは、おばあちゃんの家に行っちゃだめよ」

「え？」

ぼんやりと立ち尽くす涙子の前で、母が振り向く。

「あなた、一学期の成績ひどかったでしょ？遊んでいる暇はないはずよ」

「そ、そんなにひどくなかったよ。『5』だってちゃんとあったし……」

「いけません！夏休みは塾の夏期講習に行かなきゃだめよ！」

母はそれだけ言うと、涙子の返事も聞かずにまた石段を下り始めた。

「……なんでよ？」

涙子がつぶやく。

「お母さん、あたしをハルに会わせたくないんでしょ？」

その言葉に母がゆっくりと振り返った。そして低くて冷たい声で

涙子に言った。
「あの子の話はしないで」
『あの子』とは陽人のこと。母は昔から、涙子が陽人と会うことを嫌っていた。いや、母は、陽人のことを嫌っていたのだ。
「あたし、ハルとは会うからね！塾もちゃんと行く！だから文句ないでしょ！？」
涙子は母を追い越し、石段を駆け下りた。背中に母の声が聞こえたが、立ち止まろうとはしなかった。

涙子の父は、この小さな海沿いの町で開業医をしていた。そのためなのか、涙子の両親は教育熱心で、小学校の頃からしつけや成績にはうるさかった。
しかし涙子は、ピアノを習ったり勉強をしたりするよりも、男の子と一緒に野球やサッカーをするほうが好きだった。スカートなんかはいたことがなくて、髪はいつもショートにしていた。
だからといって、勉強ができなかったわけではない。二年生最初のテストだって、上位十番以内には入っていた。あの陽人にはかなわなかったけれど……

隣町にある大手の塾が終わる頃には、もう夕暮れだった。
涙子はバスを降りて、堤防沿いの道を、鞄を振りながらぶらぶらと歩いた。
母は『塾が終わったら真っ直ぐ帰りなさい』とうるさいけれど、家に帰っても面白いことなど何もない。無口な父に優しくされた覚えはないし、母は涙子の顔を見るたび、何かと文句を言う。
足を止め小さくため息をついた涙子の目に、見慣れた顔が映った。堤防の上に座って、陽人がにやにや笑いながら、アイスキャンディーを舐めていた。
「今日も塾？頭いい人は大変だな」

「それ、イヤミ？あんたは勉強しなくても頭いいから、得よねっ」
陽人の前に駆け寄って、その顔を見上げる。陽人は少し笑うと、堤防の上から軽く飛び降りた。
「アイス食う？」
「いらない。ハルの食べかけなんか」
「じゃあ、やらない」
陽人が笑いながら歩き出す。涙子も少し小走りになって、そんな陽人の隣に並ぶ。海から吹く潮風が、涙子の短い黒髪をかすかに揺らした。
「あんた、暇そうね」
「暇じゃないよ。今までバイトしてたんだ。そこの海の家で」
陽人はそう言って振り返り、浜辺を指差す。小さな海水浴場には何軒かの海の家が建っていて、真夏には観光客がやってきたりもする。
「バイト？中学生のくせに？」
「高浜のばあちゃんちの子って言ったら、雇ってくれた」
「信用あるんだ」
「ばあちゃんがね」
陽人が目を細めて前髪をかきあげる。何気ないふとした表情が、祖母によく似ている時がある。親子でなくても、一緒に暮らしていると似てくるってこと、あるのだろうか……
「涙子さぁ」
歩きながら、涙子はぼんやりと陽人のことを見ていた。Tシャツから出ている腕が、真っ黒に日焼けしていて、なんだかたくましく見える。涙子の後を追いかけてめそめそ泣いていた、あの小さな陽人はもういなかった。
「俺と一緒にいたら、また怒られるでしょ？俺、お前の母さんに嫌われてるもんな」
「そんなこと……」
そうつぶやいて言葉につまった。陽人はそんな涙子に笑いかける。

「じゃ、俺、先帰る」
「ちょっと待ってよっ」
思わず陽人のTシャツをつかんだ。潮の匂いがふっと鼻をかすめる。
「……石段のところまで、一緒に帰ろ？」
ふたりの脇を一台の軽トラがのんびりと走る。道路を挟んだ向こう側には、緑の山がせり出していて、ヒグラシのカナカナという声が聞こえてくる。
「いいけど。ママに怒られても知らないぞ？」
「なによっ！その言い方、ムカつくっ」
涙子が叩くまねをして、陽人がおかしそうに笑う。
このままずっと、こうやっていたいのに……どうして一緒にいられないのだろう。
涙子は心のどこかで、いつか陽人との別れが来ることを感じていた。

3

風呂上りの髪をタオルで拭きながら、涙子は机の上のガラス瓶を眺めていた。小さな瓶の中には、誕生日ごとに陽人からもらった貝殻がつまっている。涙子が右手で瓶を持ち上げた時、ドアの向こうから父と母の、言い争うような声が聞こえた。

両親が怒鳴り合いの喧嘩をすることは、めずらしいことではなかった。涙子が幼い頃からすでに、夫婦仲はよくなかったからだ。

だから涙子は幼心に、『この家には愛がない』と感じていた。祖母の愛情をたっぷり受けて育っている陽人のことが、とてもうらやましかった。

ドアの外でガラスの割れる音が響く。父が何か物を投げたのかもしれない。

昔は泣きながら止めに入ったこともある。だけど今の涙子はそれをしない。そんなことをしてもふたりの仲は、もう戻ることはないのだから……

「るいちゃんって、陽人くんと仲いいよね」

塾の講習が終わり、ノートを片付けている涙子に、同じ中学の詩織が言った。詩織とは特に仲がよかったわけでもないが、顔見知りということで、夏期講習の間はいつも隣の席で勉強していた。

「陽人？親戚だからね」

「へえー、そうなんだ」

「陽人はあたしのおばあちゃんと住んでるの」

鞄にノートやプリントを入れて立ち上がる。そんな涙子に詩織が言う。

「おばあちゃんと？陽人くんのお父さんとお母さんは、いないの？」

涙子は詩織の顔を見た。人の秘密をさぐるような、どこかわくわくしたような目をして、詩織が涙子の返事を待っている。

「いないよ」
「亡くなったの？」
「たぶん」
「ふーん、かわいそう」
かわいそう……そう、陽人はかわいそうな子。それは涙子もわかっていた。だけど……陽人の両親がどうしていないのか……どうして祖母とふたりで暮らしているのか……それを詳しく聞いたことはなかった。子供心に、聞いてはいけないことのような気がしていたからだ。
塾を出て、詩織と一緒にバスに乗った。詩織は好きな男の子の話を楽しそうにしていたが、涙子はどこかうわの空だった。なぜか陽人に会いたくて仕方なかった。

バスを降りて詩織と別れると、涙子は堤防に向かって走った。今日も陽人がアイスを食べながら、そこに座っているような気がしたからだ。
だけど陽人はいなかった。涙子は足を止めて小さく息を吐く。夕日がどこか物悲しげに、自分の影を長く伸ばしている。
その時涙子の背中に、人の気配がした。いきなり乱暴に腕をつかまれ引っ張られた。
「ちょっとお姉さん、付き合わない？」
「やっ……」
小さく声をあげて振り返る。すると陽人が、笑いながらそこに立っていた。
「バーカ、びびってやんの」
「……ハ、ハル……」
それ以上は声にならなかった。胸を押さえてしゃがみこむ。心臓がドキドキして飛び出しそうだ。
「なに？そんなに驚いた？大げさだなぁ」
うつむく涙子の顔を、陽人がのぞきこむ。

「涙子？……ごめん？」
潮騒にまぎれて、陽人の声が聞こえる。
少し前だったらこんなに驚くはずはなかった。陽人の手の感触も声も、ずっと前から誰よりも知っていた。それなのに……いつの間にかその手も声も、知らない男の人みたいになっちゃって……
「涙子、ごめんってば」
ふうっと息を吐いて顔を上げる。陽人が真面目くさった顔で、涙子のことを見つめている。
「許さない。おばあちゃんに言いつけて、しかってもらう」
「マジで？それはやめてよ」
「じゃあ、あたしの言うことをひとつだけ、なんでも聞くこと」
「なんだ、それ」
「嫌ならいいよ。おばあちゃんに言うから」
「……わかったよ」
陽人がため息をついて手を伸ばす。涙子がそっとその手に触れると、陽人は力いっぱい涙子の体を引き上げた。
「で、何を聞けばいいんでしょうか？お嬢様？」
ふふっと笑って陽人を見る。陽人はむすっとした顔をして、そっと涙子の手を離す。
「そうねぇ……何にしようかしら」
あごに人差し指を当てながら、ふと、さっき詩織が言った言葉を思い出した。
『好きな人とキス、してみたいと思わない？』
顔を上げて陽人を見る。陽人と視線がぶつかって、自分の顔が赤くなる。
「ほら、早く言えよ」
「……もったいないから、まだやめとく」
海から潮風が吹いた。涙子はくるりと後ろを向いて、逃げるように歩き出す。
「なんだよ、それ。自分で言っといて」

「だから！楽しみはあとにとっておくの！」
陽人が涙子の横に並び、堤防沿いをふたりで歩いた。ちらりと隣を見たら、オレンジ色の夕日が、陽人の横顔を優しく照らしていた。

4

父の医院の隣にある、自宅のドアを開くと、母が涙子を待ち構えるように立っていた。
「涙子、遅いじゃない！どこで道草していたの！？」
母の声には答えずに、涙子は黙って靴を脱ぐ。
「バスは四十分に着いたんでしょう？もうとっくに家に帰ってる時間じゃない！」
「……ハルと、そこで会ったから」
そう言いながら、上目づかいで母を見た。にらむような目をした母と視線が合った。
「お母さん、ハルは悪い子じゃないよ？そりゃあ一学期は、学校来なかったりしたけど……でも頭だっていいし……」
「涙子。お母さんはそんなこと言ってるんじゃありません」
「じゃあなんなの？あたしがハルの話をすると、お母さん怒るよね？どうしてお母さんはハルのこと嫌いなの？」
「嫌いなんて言ってないでしょ！？」
「じゃあ教えてよっ！ねえ、ハルはなんでおばあちゃんと暮らしてるの！？ハルのお父さんとお母さんはどうしたの！？」
母の表情が変わった。哀しいような苦しいような、複雑な表情に……
「涙子。もうやめなさい」
涙子の背中に声がかかる。普段、娘にかかわろうともしない父が、怒った顔をしてそこに立っている。
「なによ、お父さんまで……こんなときだけ出てきて、文句言わないでよっ！」
吐き捨てるようにそう言うと、今脱いだ靴を履いて外へ出た。
「涙子！待ちなさい！」
背中に母の声が聞こえたが、振り向かないで涙子は走った。

「今夜はここに泊まるって、お母さんに電話しておいたからなぁ」
ちゃぶ台の前に座る涙子に向かって、祖母が台所から微笑みかける。やがて冷蔵庫が開き、麦茶を注ぐ音が聞こえてきた。
涙子は黙って、もうすっかり暗くなった網戸の向こう側を見た。丁寧に手入れされた庭からは夏の夜風が吹き込んできて、風鈴の寂れた音が響く。
「涙子、家出してきたんだって？」
風呂上りの陽人が、タオルで髪をぐしゃぐしゃと拭きながら、涙子の前で笑っている。
「うるさいな……そんなんじゃないよ」
「またママと喧嘩したのか？」
「な、なによっ！あんたのせいなんだからねっ」
何気なくそう言ってから、ハッとした。そっと顔を上げて、陽人の顔を見つめる。陽人はさっきの母と同じような切ない顔をしていた。
「あ、いや、違うよ……あんたなんか関係ないから……」
「いいよ。どうせまた、俺と一緒にいたから怒られたんだろ？」
「違うって言ってるのに！」
すると陽人は、持っていたタオルを涙子の頭にぱさっとかぶせた。
「いいんだ。わかってるから。俺がいないほうがみんな幸せなんだ」
タオルで覆われた涙子の耳に、陽人のくぐもった声が聞こえる。涙子は思いっきりタオルを畳に投げ捨てた。
「ハルっ！あんた、なんでそんなこと言うのよっ！」
しかし陽人は背中を向けると、何も言わずに自分の部屋の襖を閉めた。
風呂から上がって、祖母とふたりでスイカを食べた。よく熟した甘いスイカだった。
「ハルは……食べないのかな……」

締め切った襖を見つめながら涙子がつぶやく。
「声をかけたんだけどねぇ。いらないって」
「ハル、スイカ好きなのに……」
涙子は顔を上げると、うちわを扇いでいる祖母に向かって言う。
「ねえ、おばあちゃん。おばあちゃんは、ハルがアルバイトしてること、知ってるの？」
「ああ、海の家のことだろう？あの子が勝手に決めてきちゃって、最初は驚いたけどね。知り合いの店だから、うちの子をよろしくって頼んでおいたよ」
『うちの子』――祖母の言ったその言葉が、とても温かく聞こえる。
「ハル、なんでお金欲しいんだろう……」
「本当のお母さんに、会いに行きたいんじゃないだろうか？」
涙子が祖母の顔を見た。『本当のお母さん』？ハルの『本当のお母さん』？
「ハルのお母さんって……生きてるの？」
祖母はうちわで風を送りながら、窓の外を見つめて答える。
「ああ、生きてるよ。今は東京に住んでる。あの子もそのこと、知ってるんだよ」
「ハルも……知ってるんだ……」
だからお金をためて、東京に行こうとしている？
「なんだかんだ言っても、自分を産んでくれた親だからなぁ……あの子が母親の元へ戻りたいって言うなら、ばあちゃんにも止める権利はないよ」
「そんな……」
祖母は涙子に視線を移し、穏やかに目を細める。
「あ、あたしはイヤだよ！ハルがどっか行っちゃうなんて……あたしはイヤ！」
「るいちゃん……」
涙子の目から涙が落ちた。こらえようとすればするほど、その涙は止まろうとしない。

泣くのなんて大嫌いだった。両親が名前に『涙』なんて字をつけるから、涙を見せれば『涙子が泣いた』ってからかわれた。それが悔しくて、絶対涙なんか見せたくなかった。それなのに……

どうしてこんなに涙が出るんだろう……どうしてこんなに寂しいんだろう……

子供のように泣きじゃくる涙子の背中を、祖母がいつまでも優しくさすってくれた。

5

その夜は、祖母と布団を並べて寝た。祖母の部屋には、古い柱時計が掛かっている。その、どこか懐かしい音を聞きながら、涙子は昔のことを思い出していた。

あれは小学校低学年の頃。梅雨のじめじめした時期に、学校から陽人がいなくなってしまったことがあった。

いなくなる前の休み時間、陽人は同じクラスの子にからかわれていた。理由は確か、授業参観に、陽人だけ祖母が来ていたことだったと思う。子供は残酷だから、お母さんが来ない陽人のことが、ただめずらしくて、からかいの対象になってしまったのだろう。

陽人がいなくなって、学校は大騒ぎになった。先生はすぐ祖母に電話をかけたけれど、家にも帰っていなくて、大人たちが町中を探し回ることになった。

涙子も一緒に陽人を探した。空は黒い雲に覆われていて、南風が強くて、海は少し荒れていたのをよく覚えている。

「ハルー！ハルー！」

ぽつぽつと降り始めた雨の中、涙子は精一杯の大声で陽人の名前を呼んだ。

だけど夕方になっても見つからなくて、涙子は祖母の家で祖母と一緒に陽人を待った。

陽人の帰りを待つ時間はとても長く感じた。祖母は心配そうに部屋をうろうろしていて、あの柱時計ばかり見ていた。

その時玄関の引き戸が開いて、父の声が聞こえた。父は陽人がいなくなったことを聞いて、すぐに医院を休診にし、町中を探し回っていたのだ。

「ハルっ」

祖母と一緒に玄関へ駆け寄ると、陽人は半べそ顔で父に抱かれて

いた。
「まったく……人騒がせなヤツだ」
父はそう言いながら笑って、雨で濡れた陽人の頭をぐしゃぐしゃとなでた。
その時の父の優しい笑顔。涙子の前では見せたことのない父の笑顔。
陽人が見つかって嬉しいはずなのに、涙子は心のどこかで陽人に嫉妬していた。
そしてそれはちょっと切ない思い出となって、涙子の胸の奥に今もこびりついていたのだ。

次の朝、涙子の母が迎えに来た。
「おばあちゃん、お世話をかけました」
「いいって、いいって。るいちゃん、また泊まりにおいでな?」
「うん……」
陽人はあれから一度も、部屋を出てこなかった。もちろん涙子を迎えに来た母の前にも姿は見せない。
母の後について石段を下りる。緑の木々の隙間から、真夏の日差しが肌を照りつける。蝉の声は耳にやかましく響き、今日も暑くなりそうだった。
「涙子、早くしないと塾に遅れるわよ」
背中を向けたままの母が、それだけ言った。

その日は勉強なんて、何も頭に入らなかった。隣の席の詩織は、今日も好きな彼の話をしていたけれど、その声も涙子の耳を、風のように通り抜けるだけだった。
塾は午前中で終わった。涙子はいつものようにバスを降り、おじぎをしている向日葵の前を駆けて、浜辺へ向かう。そして陽人がバイトしているという海の家をのぞいたけれど、そこに陽人の姿は見えなかった。

「おや、るいちゃん」
石段を上がって祖母の家に行くと、祖母は少し驚いた顔をして涙子を見た。
「ごめんね、また来ちゃって……陽人、いるかな？」
塾でも、バスの中でも、涙子の頭の中は陽人のことでいっぱいだったのだ。どうしても今、陽人と会って話がしたい。
「ばあちゃんの代わりに、買い物に行ってくれてるんだよ。もうすぐ帰ってくると思うから、中で待ってな？」
祖母はそう言うと、いつもの笑顔を涙子に見せる。
「うん。そうする」
涙子は小さくうなずいて、祖母の家に上がった。

居間に入ると蚊取り線香の匂いがかすかにした。開け放した窓からは、太陽の光をたっぷり浴びた、畑のトマトやキュウリが見える。
居間の奥にある陽人の部屋は、襖が開いたままだった。涙子は何気なく陽人の部屋をのぞいてみる。何度も遊びにきたことのあるこの部屋は、いつもと何も変わりはなかった。
古びた風鈴、脱ぎっぱなしのシャツ、机の上につまれた教科書……その時涙子は、教科書の間に無造作に挟まれている、白い封筒に気がついた。
『陽人へ』
そう書かれた文字に見覚えがあり、涙子は思わず封筒を手にとっていた。封は開かれたままで、中を見ると数枚の一万円札が見えた。
「涙子」
背中に声が響く。陽人の声だ。涙子はすぐに封筒を戻そうとしたが、慌てたためか、それはポトンと足元に落ちた。
「ごめ……あたし、のぞくつもりは……」
「いいよ。別に」
陽人はかがんで封筒を拾うと、ジーンズのポケットに押し込んだ。
「何しにきたの？」

「え、あ、あの……ハル、あんた、お母さんに会いに行こうとしてるって……ほんとなの？」
「なんだ、知ってるんだ」
陽人はちょっとバカにしたような顔つきで、涙子に笑いかける。
「本当だよ。いろいろ聞きたいこととかあるし」
「……聞きたいこと？」
涙子の胸が音を立てる。静まれ、静まれ……そう思えば思うほど、心臓の音が激しくなる。そんな涙子に陽人が答えた。
「お母さん、なんで僕を産んだのって。捨てるくらいなら、お腹の中にいる時、どうして殺してくれなかったのって」
涙子は黙って陽人を見た。見慣れた陽人の顔が、知らない人のように思えた。
「俺って、不倫相手の子供なんだって。俺の母親は俺を産んで、相手の男に押し付けた。自分が遊ばれてるってわかったから、男やその奥さんを、苦しめてやりたいって思ったんだろ？」
「そんなの……嘘でしょ？」
「ほんとだよ。でもたぶん、俺は涙子が思ってるほど、かわいそうな子じゃないよ？」
陽人がそう言ってポケットの中の封筒を差し出す。涙子の目にあの文字が映る。
「俺の父親っていう人は、遊んで暮らせるほどのお金をくれるし、俺のこと、すごく可愛がってくれるんだ。もしかしたら娘よりも、俺を跡継ぎにさせたいとか思ってるかも。ほら、俺って頭いいから」
「ハルっ！」
その言葉をさえぎるように、涙子が叫んだ。握った両手が、小刻みに震える。
「ハルの……ハルのお父さんって……」
あとは言葉にならなかった。封筒に書いてある名前がぼやけて見える。
「そうだよ。俺の父さんは、お前の父さんだよ」

陽人の声は、どこか遠くから聞こえてくるようで、現実のものとは思えなかった。

6

汚い。大人は汚い。大人たちが好き勝手しているせいで、子供たちが苦しめられる。自分の父のせいで、陽人が苦しめられている。

「涙子？ご飯よ。早くいらっしゃい」

母がさっきから涙子を呼んでいる。母だって父のせいで苦しめられたんだ。

「いらない……お腹すいてない……」

それだけつぶやいて机に顔をうずめた。右手に貝殻のつまった小瓶を抱きしめて……

次の日も、その次の日も、涙子は決められたとおりに塾へ通った。浮き輪を持った家族連れとすれ違いながら、そう言えば梅雨明けしてから一度も雨が降っていないと気づく。

雨が降ればいいのに……雨が降って海があふれて、父の病院も、この町も、何もかもなくなってしまえばいいのに……

重い足取りでバスを降りた。模擬試験の結果は最悪だった。こんなものを父に見せたら、きっとあきれられるだろう。

塾の夏期講習にいくら払っていると思ってるんだ？お前の成績を上げるためにいくらつぎ込んでいると思ってるんだ？お前なんかいらない。うちには陽人さえいればいい。陽人は勉強ができるから、うちの跡取りにすればいい。

堤防の手前で足を止める。オレンジ色の空の下、涙子を待っていたかのように、陽人が堤防の上から飛び降りた。

「この前はごめん」

涙子の前で陽人がつぶやく。ふたりの上を海鳥たちが羽ばたいている。

「意地悪言って……ごめんな？」

会わなくなってたったの数日しか経っていないのに、もう何年も会わなかったような気がするのはどうしてだろう。
涙子は何も答えずに、ただ黙って首を横に振った。
「俺、東京に行くから」
陽人の聞きなれた声が耳に響く。
「涙子には、言っておこうと思って」
「……すぐに帰ってくるんでしょ？お母さんに会ったら、すぐに帰ってくるんでしょ？」
「それは、わかんない。帰ってくるかもしれないし、帰ってこないかもしれない」
「やだよ！」
涙子は思わず陽人のシャツをつかんでいた。握りしめたその手がかすかに震える。
「帰ってこないなんて言わないで！あんたの家はここでしょ！？ここで今までどおり、おばあちゃんと暮らせばいいじゃない！？」
「でも、俺がここにいると、涙子のお母さんが悲しむよ？」
母の哀しげな表情が頭をよぎる。
「そんなのは……ハルのせいじゃない」
「それに……」
陽人は涙子の手にそっと触れると、自分の服から引き離す。
「それに？」
涙子が陽人の顔を見る。しかし陽人は目をそらし、黙って涙子に背中を向けた。
「ハル……行かないで」
涙子はつぶやく。
「行かないでよ、ハル」
「……ごめん」
夕日がアスファルトの上に影を伸ばす。幼い頃から歩きなれたこの道。ふたりで手をつないで歩いたこの道。
小さくておとなしくて、クラスの男の子たちにいつも泣かされて

いた陽人。
「ハルっ。泣いちゃだめ」
そう言って、陽人の手を引きながら、祖母の家まで歩いた。
「あたしが明日、あいつらのこと殴ってやるから。だからもう、泣いちゃだめ」
涙子の隣で陽人が鼻をすする。そんな陽人の小さな手を、ぎゅっと握ったあの頃……
今、涙子より背が伸びた陽人が、背中を向けて歩いていく。泣いている涙子のことを、振り向こうともせずに歩いていく。
「陽人の……バカぁ……」
その夏、陽人の姿を見たのは、この日が最後だった。

7

「明日から夏休みかぁ……」
古びた校舎を出た途端、蒸し暑い空気が頬に当たった。肩まで伸ばした髪が、ブラウスの襟のあたりをまとわりつく。涙子は髪を耳にかけ、ピンク色の傘を雨の中に開いた。
「涙子、今日もマック寄ってく？」
同じクラスの葵がそう言って、赤めの髪をかきあげる。彼女の耳に、最近開けたばかりのピアスが光る。
「うーん、今日はやめとく」
「なんでぇ？康介くんとデートとか？」
「違う違う。そんなんじゃないって」
十七歳になったばかりの涙子は、隣町にある公立高校に通っていた。本当は親の進めた、このあたりでは有名な私立高校へ行くはずだったのだが、受験に失敗してしまったのだ。
両親はそのことでしばらく嘆いていたが、涙子はどうでもよかった。
『勉強なんて意味がない。それよりもっと大事なもの、あると思わない？』
いつかの陽人の言葉が、今ではわかるような気がしていた。
だけど涙子は思うのだ。あの頃の陽人にとって、勉強は『意味のあるもの』だったのではないか？
勉強ができれば父に気に入られる。そばに置いてもらえる。捨てられることはない……小さい頃から自然と、陽人はそんなことを思っていたのではないだろうか……
「あー、あたしも彼氏欲しー」
葵が携帯をいじりながらつぶやく。ふと空を見上げたら、降っていた雨がいつの間にかやんでいた。涙子は傘を閉じて、葵と同じように携帯を開く。

涙子の携帯には、朝から何通も康介のメールが入っていた。
『今日、うちに遊びにこない？』
康介は、高一の終わりに、友達から紹介してもらった彼氏だ。近くの工業高校に通っていて、背が高くてわりとカッコいい。中学からバスケをやっていることと、カラオケがうまいのが自慢らしい。
だけど……涙子にとって康介はそれだけの男だった。好きでもないし、嫌いでもない。ただなんとなく付き合っているだけ。
「行くの？康介くんち」
葵が携帯を覗き込んでにやりと笑う。
「断る」
「なんでぇ？」
康介の家には何度も誘われている。だけど一度も行ったことはない。なぜって……行ったらやることは決まっているから。涙子は康介に、キス以上のことは許していない。
「もう、ダメかもな……」
断りのメールを送信してつぶやく。何度も誘いを断る涙子に、康介もそろそろ愛想をつかすだろう。やらせてくれない女なんていらない。康介にとって涙子も、きっとそれだけの女なんだろう。
「あ、メールだ」
涙子の携帯が震えた。
「康介くんから？」
「ううん……親」
携帯の画面には、祖母が亡くなったという文字が並んでいた。

空は青く晴れ渡っていた。海から吹く南風が、梅雨の終わりを告げている。涙子は喪服の大人たちの中からそっと抜け出し、高台の寺院から、ひとり海の見える道へ下った。
この道を歩くのは久しぶりだった。銀色に輝く穏やかな波を眺めながら、涙子は何気なく母のことを想う。
一年前、母は父と別れ、この小さな町を出て行った。涙子は母に

『一緒に行こう』と言われたが、結局父と残った。
母より父を選んだわけではない。むしろ父とは、ほとんど会話もないような関係だった。それでも涙子はこの町にいた。この町にいれば……いつかきっと、あいつに会えるような気がしていたから……

やがて堤防沿いの道で、涙子は立ち止まる。そして両手を伸ばして手を掛けると、制服のスカートを広げ堤防によじ登った。
「ハル」
涙子の声に後ろ向きの背中が振り向いた。三年ぶりに見る陽人は、少し痩せて髪が伸びて、なんだかとても大人びて見えた。
「涙子？」
「そうだよ」
「お前、やっと女みたいになったなぁ」
堤防に座ったまま陽人が笑った。その笑顔はあの頃と変わっていなかった。

8

「なんでこんなところにいるの？おばあちゃんにお別れしに来たんじゃないの？」

涙子はあふれ出しそうになる気持ちを抑えながら、陽人の隣に座る。海がどこまでも青く、涙子の目の前に広がっている。

「いいんだよ、ここで。俺が行ったら、大人たちがまた、騒ぐだろ？」

そして脇にあった袋の中からトマトをひとつ取り出した。

「食う？ばあちゃんちの庭から取ってきた」

涙子はそれを受け取ると、両手で持って、がぶりと一口かじりつく。甘くて懐かしい、祖母の味だ。

「おいしい」

涙子の言葉に陽人が笑って、もうひとつのトマトを同じようにかじった。

「ハル……あんた、お母さんと一緒に住んでるの？」

海からふっと風が吹いて、涙子の長く伸びた髪を揺らす。プールバッグをぶら下げた子供たちが、はしゃぎ声をあげながら、ふたりの後ろを通り過ぎる。

「住んでないよ。あの人にも家庭があったから」

「え？」

「でも住むところも見つけてくれたし、学校にも行かせてくれたし……金は父親が送ってくれるし。俺、けっこう優雅なひとり暮らしってるんだ」

「なに言ってるの？そんな暮らしより、ここでおばあちゃんと暮らしたほうがずっとよかったに決まってるじゃん？おばあちゃん、口には出さなかったけど、あんたのことすごく心配してたと思うよ？」

そこまで言って陽人を見る。陽人はぼんやりと水平線を見つめている。

「……怒ってるかな？ばあちゃん」
「怒ってるよ……」
「でも、いつまでも、ばあちゃんに迷惑かけたくなかったから……」
陽人がそう言ってうつむいた。
そうなのだ。祖母はいつも陽人を想い、陽人は祖母のことを想っていた。
陽人がいなくなったあとも、祖母は毎日綺麗に陽人の部屋を掃除していた。『あの子の気が変わって、ひょっこり帰ってくるといけないからねぇ』そう言って祖母は笑顔を見せた。
一方の陽人は町を出る時、自分でアルバイトをして貯めた東京までの交通費と、わずかなお金しか持っていかなかった。涙子の父からもらっていたお金は、全部祖母の部屋に置いてあったそうだ。
「戻ってくれば？」
涙子がつぶやく。
「戻ってきなよ」
「無理だよ」
「どうして？うちのお母さんのこと、まだ気にしてるの？だったら……」
「それだけじゃない」
涙子は黙って、陽人の顔をのぞきこむ。
「これ以上好きになったら、困るだろ？」
これ以上……好きに？
「お前のこと、好きになったら困るだろ？」
陽人が顔を上げて、涙子を見た。涙子の視界に陽人が映る。あんなに会いたいと思っていた、陽人の顔が……
陽人は涙子から目をそらし、ゆっくりと立ち上がると、堤防から飛び降りた。
「ハルっ、ちょっと待ってよ！」
涙子も立ち上がり、スカートの裾も気にせず飛び降り追いかける。
陽人の背がまた高くなっていることに、今初めて気がついた。

真夏の空の下を、陽人について歩いた。陽人はもう泣き虫の小さな男の子ではなくて、涙子も男勝りの何も知らない女の子ではなかった。
「ハル……」
歩き続ける陽人の背中に、その名前を呼んでみる。
「陽人」
涙子が呼んでも、頼んでも、泣いても……やっぱり陽人は行くのだろう。三年前と同じように、涙子が止めても行ってしまうのだろう。だったら、最後に、一度だけ……
「ねえ、キスしよ？」
陽人の足が涙子の前で止まる。
「あたしの言うこと、ひとつだけ聞くって約束。まだ果たしてないよ？」
陽人が振り返って涙子を見る。涙子は一歩だけ歩み寄って、陽人の前で目を閉じる。
「大丈夫だよ。あたし、初めてじゃないから」
暗闇の中で聞こえてくるのは、かすかな潮騒と、今にも飛び出しそうな自分の心臓の音。『大丈夫』なんかじゃ全然ない。
「涙子」
陽人の声が聞こえた。少しかすれた、懐かしい声。そして涙子の額に陽人の唇がかすかに触れた。
「……これ、やるよ」
ゆっくりと目を開ける涙子の手を、陽人の温かな手が包む。そしてポケットから何かを取り出すと、手のひらの上にそっとのせた。
「遅くなってごめん。三年分」
涙子の手に小さな貝殻が三つのっている。だけどその貝殻は、涙子の涙でぼやけていった。
「バカ、遅いよ」
「ごめん」

「三年前のプレゼントなんか、今頃もらったって……」
「じゃあ来年は、誕生日に来るよ」
涙子が顔をあげて陽人を見る。陽人は少し照れたような笑顔を見せる。
「来年も再来年も、そのあともずっと……お前の誕生日には会いに来る」
「嘘……ばっかり……」
陽人が笑って涙子の手のひらを指差す。
「それ、大事にしろよな」
そして背中を向けると、また歩き出した。
「約束……だからね！」
陽人に向かって涙子は叫ぶ。背中を向けたままの陽人が小さく手を振る。
涙子は手のひらの貝殻をぎゅっと握った。その上にぽつんと、涙の粒が落ちる。いつの間にか泣き虫になってしまったのは、涙子のほうだった。
夏が過ぎ秋が過ぎ、冬と春が過ぎてまた夏が来る。来年の夏、きっと少しだけ、涙子も陽人も変わっているのだろう。毎年ふたりは変わっていって、やがて大人になってしまうのだろう。
だけど今は陽人の言葉を信じよう。また来年ここで会おう。七月の誕生日に、梅雨明けの季節に、白南風の吹く頃に……
もう涙子に手を引かれることのなくなった、陽人の背中を見送ってから、涙子も涙をぬぐって歩き出す。陽人からもらった貝殻と、人を好きになるという、温かくてちょっと切ない気持ちを抱きしめて……
『学校の勉強よりも大事なもの』――それが今やっとわかった。

8（後書き）

最後まで読んでいただき、どうもありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3109n/

白南風の夏

2010年10月8日12時26分発行